The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「なぜ生きているのか、という問い」(10歳) から「臨床哲学に身を置く」(71歳) まで : 臨床哲学に、一番遅くやってきたものとして、考えてみる
Author(s)	正置, 友子
Citation	臨床哲学. 2012, 13, p. 91-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5844
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「なぜ生きているのか、という問い」（10 歳）から「臨床哲学に身を置く」(71 歳) まで
―臨床哲学に、一番遅くやってきたものとして、考えてみる―

正置友子

はじめに

2011 年 4 月に、大阪大学大学院の臨床哲学というところにやってきました。これまで生きてきた道のりを抱えた上で、「子ども（乳幼児）と絵本」というテーマで纏めたいと考えています。なぜ臨床哲学に身を置いてこのテーマで書くことにしたのかを、この稿では考えてみたいと思います。

1. そもそもの「私」のはじまり

1940 年 1 月 2 日に名古屋港の近くで生まれました。いつ生まれたかは、その人のその後の考え方を方向付ける上で大きな役割を果たします。1940 年生まれということは、戦争中に乳幼児期（人間の土台をつくる時期）であり、小学校入学が戦後であったということ、また小学校教育は民主主義教育だけを受けて育ったということは、人間観の形成上重要なことだろうと思います。生まれが数年前の人であれば、戦時中の教育と戦後の教育の在り方に 180 度の転換（墨塗り教科書[1] など）を強いられ、おとなや社会への不信感が根底に育成されたはずです。1950 年の朝鮮戦争以降に生まれれば、国際紛争の中で日本も再軍備化へと巻き込まれていく状況で育つことになります。小学校時代の教育も社会・文化も、民主主義という言葉が持てはやされる雰囲気の中で育ち、ひとりひとりの人を大事にする社会を築こうという風潮が巷にまで広がり、人を信ずるという人間観を植え付けられたかもしれません。

2. 10 歳のとき

10 歳の或る日、突然に、「私はなぜ生きているのか」という疑問が降ってきました。10 歳という年頃は、時間・空間の中にわが身を置く最初の年頃です。昨日今日というからだでわかる時間のスパンではなく、人類の何千年、何万年という時間の流れがあり、その中に自分をポジショニングできるようになる年頃です。また、家庭や隣近所だけではなく、地球という広大な空間があり、その中に自分をポジショニングしてみることができる年頃でもあります。すると、人間の長い歴史の中で、なんとたくさんの人たちが生き死にしてきたのだろう、その中の「自分」とはなんだろう、と考えます。また、この広大な地球上には、なんとたくさんの人たちが生きていることだろう、その中の「自分」とはなんだろう、とも考えます。どんなに、「一つの命は地球より重い」とか、「かけがえのない命」とか言われようと、あまりにも厖大な数字のなかの「ひとり」にすぎません。そして、世の中を見まわしても、戦後すぐの時代であってみれば、文字通り襤褸をまとった人たちがいましたし、親を亡くした子どもたちはたくさんいて、社会の多くの人たち（当時の私には「政治」という言葉は遠いものでした）が、ひとりひとりの命を「かけがえのない命」と考えているようには見えませんでした。私が、「なぜ生きているのか」と考えたことは、価値あることをした人が生きる資格があるということではなく、「人は、なぜ生きているのか」という根本的な問いでした。

同時に、私を打ちのめした知識がありました。当時、父が子どもたちに科学的な考え方を身に着けたいと願ったのでしょう、『子どもの科学』[2] という雑誌を取ってくれていました。その記述の中に、宇宙の中での地球の成り立ちが書かれていましたが、その中に、地球はいずれ爆発し消滅すると書かれていました。当時すでに本というものに最高の価値を置き、読書が人生の大事なものであると思っていたものにとって、このことは衝撃でした。地球上における「私」の個人的な存在の証しは必要としないとしても、地球上に生命体が存在し、人類が存在したという記録（書物など）が全く残らない、それを読んでくれる人たちもいない、ということは、耐えられないことでした[3]。

この時点から、私にとっては抜き差しならない形而上学的と言ってよい問い「私はなぜ生きているのか」が始まりました。

3. 以後、本を読んで生きる

「なぜ､私は生きているのか」という問いの答えは本の中にあると信じていました。以後、読みました。ほとんど物語の本ばかりです。10 代の後半からは、宗教的なもの、哲学的なものも読みましたが、ひとりひとりの人間像が描かれている物語の方に魅かれ、大学は英文学科に入りました。毎日辞書を引き、物語ばかり読んで、人とは話さず（人と向かい合うこと、話すことが苦手でした)、卒業しました。（大学時代の 4 年間、10 回しゃべったかとその後友人から言われるほど、本ばかり読んでいました。） 当時、研究というものは、重箱の隅をつつくような論文を書くことだと思い込んでいたこともあって研究者になることは辞め、職業としての教師には全く向いていないことも自覚していたので、その後は、翻訳的な仕事、通訳的な仕事をしましたが、とにかく、本を読んで生きてきました。

4. 結婚して大阪へ

名古屋の女と関西の男が東京で出会い、1965 年に結婚し、大阪に住むことになりました。当時、名古屋で仕事をしていた私は、開通したばかりの新幹線で [4]、土日に名古屋―大阪間を通いました。それでもなおかつ、「私はなぜ生きているのか」と問い続けていましたので、大阪に落ち着くとすぐに、京都大学まで出かけて行って、「私はなぜ生きているのか知りたい。どの学科に入ったらいいですか」と尋ねました。「哲学」です、と教えられ、聴講生として、哲学のゼミに入れていただきました。60 代くらいの教授と 30 代くらいのふたりの院生と私の 4 人が英語で哲学の本を読みましたが（誰の哲学書だったのか、記憶にありません)、全く頭に入って来ず、聴講料を払っていない英文学の講義に出るようになりました。御輿員三先生 [5] の英詩の講義に出て、英語の詩を読むときの何事にも代えがたい、説明しがたい、からだ全体の喜びに再び出会い、「ことば」自体の喜びをどう表現したらいいのだろうと考えつつ、またまた、本を読んで過ごしました。すぐに長男の出産、次男の出産、娘の出産と相次ぎ、毎日毎日、おむつを洗いました。一日でもいい、おむつ洗いをしないでもいい日はないだろうかと思い [6]、授乳しながらも本を読み続けました。

5. 子育て

子どもたちは私にとって大事な存在ではありますが、子どもは、私をこの世につなぎとめておくものではなく、「なぜ、私は生きているのか」という問いは、子どもの誕生で止むことはありませんでした。本を読み続ける母親に、6歳の長男が「おかあさん、ごはんと本とどっちがすき？」と訊きました[7]。「おかあさんも生きものだから食べなければ生きていけないけれど、本を読まなければ生きていけない」というようなことを答えました。子育てしながら、授乳しながら、料理をしながら、本を読み続けました。いわゆる、おとなの文学と言われているものですが、この頃はイギリスものが多く、団地新聞で呼びかけて「原書で本を読む会」というグループを作り、数人の主婦が集まってバージニア・ウルフなどを英語で読んだりしていました。

ある日、書店に立ち寄り、私が購入した数冊が「岩波の少年文庫」シリーズの作品でした。いわゆる児童文学と言われるカテゴリーの作品で、子ども時代に読んでいたものですが、その時の私にはその意識は全くなく、新鮮ですらありました。児童文学の本には、物語という形を通して、生きるとはどういうことかが書かれていました。ある本には、こう書かれていました。「なぜ生きているのだろう、と考えるのが、生きているということです。」この当たり前の言葉が、私には、すっと胸に落ちました。もちろん、「なぜ生きているのか」に真正面から答えてくれているわけではありませんが、私の中で何かが変わりました。今まで、自分の内側にだけ向いていた歩みが、外側にむかった一瞬でした。量が質に変わる時、という言葉を私は大事にしていますが、この時がその時でした。本を読んで、読んで、ある日、出会った児童文学の本が、私のからだの向きを変え、「まず、生きてみよう」という思いにさせてくれたのです。

そして、文庫を開設しました。文庫というものは、子どものための本のある場所と考えられていますが、その時に私の頭にあった対象は、おとなでした。私は、ほとんどの人が、「自分はなぜ生きているのか」と考え、悩んでいるのだ、と思っていました。そこで、児童文学を読んで頂くと、これまで閉まっていた扉が開くかもしれない、私がそうであったように、と思い、周りのおとなの方が来てくださったらという思いで、青山台文庫をオープンしました。

6. 青山台文庫の開設

1973 年の秋 11 月でした。私は 33 歳、子どもたちは、6 歳、5 歳、3 歳になっていました。開設場所は、千里ニュータウン[8]にある公団の３ＤＫです。50 ㎡にも満たない住居には、私たち夫婦に子ども 3 人、そしてほとんど結婚と同時から一緒に暮らした夫の父の計 5 人がいました。エレベーターなしの 5 階建ての建物の 5 階です。文庫を開設した途端、予想もしなかったことがおこりました。地域の子どもたちが、どっと押しかけてきたのです。数か月後には 100 人にもなりました。公団３ＤＫの玄関は非常に狭く、わが家の住人だけでも靴の置場が足りないほどです。文庫にやってきた子どもたちの靴が、五階の踊り場に敷き詰められ、四階へと連なる階段にも並びました。後からやってきた子は、靴を下で抜いで、先に来た子たちの靴の上を踏んでわが家にたどり着きました。

家の中と言えば、壁面全部が本箱。内側の畳のスペースにも本棚があり、11 基の本箱が並んでいるミニミニ図書館というありさまでした。一つの部屋とＤＫが繋がっている部分の襖は取り払われて、そこには結婚と同時に購入した 10 人掛けのテーブル[9]があり、ここが受付になりました。やってきた子どもたちは、本棚と本棚の間の狭いスペースに座り込んで本を読み、幼い子は、母親たちがおしゃべりをしている間、テーブルの下に寝転がったりしていました。私は、当初戸惑いました。近所の人と挨拶するのも苦手で、出来ることなら人と会わないように暮らしていたい性質でしたから。おとな同士の会話はなんとかなりましたが、子どもたちとどう話したらいいのか、困りました。実は、「こんにちは」というのさえ、頑張らなければならないほどだったからです。しかし、どんどんとやってくる子どもたちや母親たちに向かいあい、話し合う必要に迫られ、口を開くようになっていきました。

当時は、どちらかと言えば、おとな用の本が多く、幼い子ども用の本は、わが家の子どもたちに読んだものばかりで、とてもやってくる子どもたちの要求を満たせるものではありませんでした。私は、初めて、図書館や市役所に出向き、文庫に本を貸し出してください、と言うようになりました。私の背の後ろにはたくさんの子どもたちがいて、勇気をだすように背中を押してくれていました。吹田市の中にも文庫の数が増え、吹田市子どもの本連絡会が結成されました。大阪府段階でも、文庫の仲間が手をとりあって、大阪府子ども文庫連絡会を結成し、一人ではできないことを、集まり纏まることで、勉強会を行い、講座を開催し、大阪府や各市へも陳情書などを持って出かけて行くようになりました。

7. 文庫について

文庫は、地域で子どもたちと本を結ぶ場であり、たいていボランティアである母親たちによって運営されています。文庫は、世界の子どもの本の関係者からはＢＵＮＫＯと呼ばれ、日本独自の本のある場として世界的に注目を集めてきました。石井桃子さんが 1958 年に「かつら文庫」という子どものための図書室を開設され、その後の 7 年間の記録を 1965 年に『子どもの図書館』に纏められ、出版されました。このことを契機に、子ども文庫は日本中に広がっていきました。日本における図書館の少なさや質の悪さもあいまって、1960 年代の終わりころから 1970 年代にかけて、日本列島に多くの文庫が誕生し、1980 年代には、最盛期に達しただろうと思われます。石井桃子さんの「新編子どもの図書館」が『石井桃子集』第 5 巻として 1999 年に出版されたとき、松岡享子さんが解説文の中で、文庫の数について、「今も全国に約五千、公共図書館の約二倍の数存在している」と書いています [10]。また、子どもの読書推進実行委員会が 1998 年に行った全国読書グループ調査によると、子ども文庫の数は（公共図書館による調査で）5,356 あったそうです。調査には漏れている文庫も考えられるので、その点も考慮にいれると 2000 年前後にも約 6,000 の文庫が存在していると言えます [11]。

日本の文庫活動は、子どもたちと本を結ぶことを目的として始まりました。初めは読書活動でしたが、そこから図書館活動へと広がっていきました。それまでＰＴＡ活動などでも、会長は男、副会長以下が女という役割分担をし、社会的な場で発言することに躊躇していた女性たちが、1970 年代から 1980 年代にかけて、自分の文庫にやってくる子どもたちだけではなく、自分の市町村の全ての子どもたちに良い読書環境を作りたいと考え、図書館運動を展開し、市民のための図書館作り（単なる蔵書の図書館ではなく）に関わってきました。文庫に本がもっとほしい、図書館を設立してほしいなどの要求を持って、先頭にたって、図書館長、教育部長、市長に会いに出かけて行きました。普通の女性たちが、政治的なことに発言するようになっていったのです。文庫活動自体は、読書活動であり、子育て活動でもありますが、活動を進めていく中で、女性運動であり、文化活動であり、社会的活動であったと言えます。文庫活動を通じて、物言わぬ女から物を言う女へと、時代の流れと並行してですが、変身を遂げていった女性の歴史があるような気がします。こうした経緯は、女性たちが、自分も本を読み、子どもたちにも本を読む人になってほしいという願いがあったことと無関係ではないでしょう。

8. 青山台文庫の経過

どんどん増加する子どもたちに対応するには、わが３ＤＫはパンク状態になりました。各部屋の襖は全て消え、押し入れの襖もなくなり、訪れる子どもたちの数は、どんどん増えていきました。ついに、文庫の開設場所を個人の住まいから、地域の集会所へと移転することにしました。この時､地域の人たち（自治会の中心的役割を果たしている男性たち）とぶつかりました。その時までも､「どこかの女が、子どもを集めてなにかやっとる」､「売名行為だ」､「どうせ､市会議員に立つんだろう」という声が聞こえてきていました。それが、地域の集会所に本箱 10 基の常設となると､表立って大問題になりました。地域の「自治会」にも「子ども会」にも所属していない「個人、しかも女が勝手にやっている会」に、集会所を使わせることはできない、ということでした。結果として、中には理解ある人たちもいて､「いいだろう」ということで、青山台Ｃ 42 棟公団集会所でのオープンが可能になりました[12]。1978 年 4 月のことです。以来､この集会所で文庫を毎週開催してきました。

文庫の活動内容としては、以下のものがあります。

１）文庫の日　現在は、毎週水曜日午後、 詩や絵本やおはなしを楽しむ。工作をするなど。

２）小学生読書会（低学年、高学年）月 1 回

３）おかあさんの絵本の会　月 1 回

４）おかあさんの読書会　月 1 回

５）年間の行事　講演会、文庫祭り、人形劇ほか

６）「だっこでえほんの会」 0 歳から 3 歳までの絵本の会　月 2 回

9. 絵本の研究のためイギリスへの留学

絵本についてもっと研究したいという思いがどんどん膨らんでいきました。私は、幼い頃からの活字人間で、幼児期における絵本体験はありません。それが、自分の子どもたちや文庫の子どもたちに絵本を読む機会が増えました。絵本を子どもたちに読んでいるときに、子どもたちのからだつきや表情、あるいはちょっとした言葉などから、子どもたちが非常に深く絵本の世界に入り、共感し、共鳴していることがわかり、子どもたちの感性の素晴らしさと、そのように子どもたちに受け取られている絵本という表現媒体に驚きを

持って出会いました。絵本というものは、見開き（左右２ページ）の絵をじっと見るために立ち止まらなければならないのですが、次から次へとページを捲りたい人間には、一つの見開きをじっと見ていることは忍耐を要しました。しかし、子どもたちが絵本を見る集中力、そして絵本に出会う時の絵本と子どもの間に走る電流、子どものエネルギーが絵本と自分のまわりに作り出す磁場のようなものに、私も吸い込まれていくのを感じました。

この空気は（活字ばかりの）物語の本の時にもないわけではありませんが、絵本の時は、もっとはっきりとその磁場が目に見えるのです。もともと絵を見ることも好きだったので、絵本の言葉を読むこととは別に、絵を読み込むことをしてみました。それから、言葉（文学）と絵（美術）とを一緒に見て、次には、捲るという機能を大事にして見ていってみました。すると、そこにシェイクスピアではありませんが、絵本はドラマの舞台であることが見えてきました。絵本は表現形態としての特異性を持っています。1 冊の絵本における最少ユニットは 1 見開きで、1 見開きが 1 場面（舞台）を構成し、だいたい 15 場面で物語を完成し[13]、一つの世界を構築します。言葉と絵の間の読み取りの多様性、見開きから見開きへの未来（期待）に向けての読み取りの多様性があり、1 冊の絵本でも多様な読み取りを可能にします。その結果、年齢、性、文化、民族などの境界を超える可能性を有しています[14]。

そして、私自身、絵本表現の可能性に魅せられるようになり、絵本のことをもっと知りたい、絵本がどのようにして現在のような形態をもつようになったのかその歴史を知りたいと思うようになりました。しかし、絵本に関する研究書はなく、絵本について研究する場も日本にはありませんでした。

1994 年の秋に、イギリス国立ローハンプトン大学大学院文学研究科に入りました[15]。渡英時点では、博士論文を書くなどということは考えてもいませんでした。イギリスに到着早々に出会ったのが、ウオルター・クレイン（1845-1915 ）の絵本でした。ここから、私はヴィクトリア時代（1837-1901）の絵本の研究にのめり込んで行きました。ブリティッシュ・ライブラリー、ヴィクトリア＆アルバートミュージアム内にある国立美術図書館、オックスフォード大学図書館およびケンブリッジ大学図書館その他のイギリスの主だった図書館に所蔵されているヴィクトリア時代の絵本はほとんど全部見ました。その時の指導教官であったキンバリー・レイノルズ教授が、私の研究ぶりをみて「博士論文を書いたらどうか」と提案してくれました。また、子どもの本の歴史研究の世界の第 1 人者であるブライアン・オルダソン先生の指導を個人的に得ることができ、結果として、イギリス滞

在 6 年間の生活必要時間以外の全ての時間をかけて仕上げたのが、2000 年にローハンプトン大学に提出し受理された博士論文 *A History of Victorian Popular Picture Books* でした。研究過程の半ば頃にわかったのですが、ヴィクトリア時代の絵本の学問的、網羅的な歴史研究は、アメリカの研究者もイギリスの研究者も誰もしていなかったのです。そして、この論文は、イギリスでは刊行がかなわず、日本の科研費を得て、2006 年に風間書房から英文のままで出版することができました[16]。この本は、「イギリスの子どもの本歴史協会」より、2 年に一度与えられる「ハーヴェイ・ダートン賞」[17] を 2008 年に受賞しました。今のところ、ヴィクトリア時代の絵本研究ならトモコ・マサキだと言われています。自慢めくいい方ですが、絵本の研究は世界的にみても、まだまだだということ、いい換えれば、可能性のある分野であることの現われでもあります。

帰国してすぐに、ある大学から絵本について学生たちに教えてほしいということで、非常勤の仕事をし、幼児教育専門の伝統ある大学[18] から大学院で教授として迎えたいとの声があり、2009 年まで仕事をしました。

10. 理論書を読む授業に参加して

イギリス滞在中に大学院の授業に出ました。一番の収穫は、理論書を読むという授業で、15 回の授業中、毎週一人の理論家の本を読んでくるというものでした。フロイトの『精神分析入門』、ベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』、レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』、アリエスの『〈子供〉の誕生　アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』、バルトの『エクリチュール』、デリダの『グラマトロジー　根源の彼方に』、サイードの『オリエンタリズム』などです。1 週間に 1 冊、しかも英文で読むのは不可能なことで、リーディング・リストを受け取るとすぐに、翻訳があるものは送ってもらえるように日本に手配しました。しかし、日本語であっても、他にも読まなければならないもの、しなければならないことがあるなかでは、これらの本を 1 週間に 1 冊読み通すことは厳しかったことを覚えています。この授業は、イギリスの修士の学生たち（児童文学科ということもあって、ほとんどが学校の教員か管理職、図書館員でした）にとっては、非常に評判の悪い授業でした。この授業は、当時オックスフォード大学の博士号を取得したばかりの若い女性カーリン・レズニック＝オーベルシュタインで、その持てる能力をすべて伝えようと一生懸命でした。イギリス人たちにとっては不評でしたが、この授業は私のそれまでの考え方の土

台を覆し、再構築する役割を果たしてくれた大切な授業となりました。この授業を通して私が学んだことを３点に纏めることができます。1）人間のからだの中には、自分でも意識していない無意識の層があること、2）読み取りにおいて、正しいとされる答えはないこと、3）自分の物の考え方は、その時代の文化・社会の有り様の中で形成されるということ。

この時の経験が、学問をするときの身体性と学問をする方法という二つの点から、今回の臨床哲学入門と結びついていると思われます。学問は机上だけでする必要はなく、「いま、ここに」生きている自分の生身のからだ全体を通して見たり、聞いたり、触ったり、感じたりすることを大切にすることからも生まれるものであること、一方物事を根本的に考えたいときには、メタ的思索、すなわち哲学が必要であることを学んだと言えます。

11. その後

幼児教育関係の大学で仕事をするようになり、保育や教育関係者の間で、子どもと絵本の関係について、これまで本格的な研究がされてこなかったことを知り、愕然としました。私が子どもたちと絵本を読んできた年月、絵本を研究してきた年月を思い、その年月を支え続けてくれた夫や子どもたち、文庫に関わる人たちや子どもたちのことを思い、「子どもと絵本」について纏めていくことと、伝えていくことは、私に与えられた仕事かもしれないと思うようになりました。

2009 年に、個人的な絵本学研究所を設けました。多分、世界で唯一の絵本学研究所です。現在、日本の大学では、文学部は縮小されていっています。英文学科は消滅しかけています。児童文学科はなくなりました。制度化されたアカデミックな場で絵本を研究できる機関はなくなりました。絵本という文化財は、文学にも美術にもデザイン学にも子ども学にもはまりきらないため、どこからも顧みられず、絵本を研究できるところは、どこにもないという状態になりました。しかし、一方では、絵本はどんどん出版され、絵本愛好家は増え、幼稚園や小学校・中学校へ絵本を読みに行くボランティアは増加の一途を辿っています。

絵本学研究所は狭く、寺子屋みたいなものですが、大阪近辺はもちろんですが、名古屋から福井からと勉強にきてくださる方々もおられます。絵本を幼い子どもの為の幼稚なもの、ではなく、幼いこどもにとってだけではなく、一つの芸術形態として研究を続けてくださる人がひとりでもふたりでも出てきてくださることを期待しています。また絵本とい

う文化財は、美学、デザイン学、子ども学、心理学、社会学、歴史学、比較文化学など多様な視点から研究できる素材であることを知っていただきたいという願いも持っています。

12.〈子どもたちと絵本〉を通して「生きるということ」を考えたい

青山台文庫は、私にとって、人生の学校でした。一方では、本を読み、本の世界で生きることはやはり好きであり、そこから受け取るものも多くありますが、文庫を 40 年近く主宰してきて[19]、文庫の中で、子どもたちに育ててもらったという思いが強くあります。文庫はまさしく、わたしにとって、「生きられた場」であり、私が「生きた場」であったと思います。

文庫の取り組みの中に、2001 年からスタートした「だっこでえほんの会」があります。0 歳から 3 歳くらいの子どもたちとの絵本の会です。この会をするようになって、生まれて最初の 3 年間の子どもたちに接し、その感性、想像力、エネルギーに圧倒されてきました。私のこれまでの知識や学識や経験などは、3 歳の子どもたちの絵本を見詰める集中力、絵本から感じ取っている感性、絵本に向かい合う全人間性の強さには、太刀打ちできません。同じ子どもたちが、生まれて 4 か月くらいからの 3 年間、月 2 回文庫に通い、私の絵本読みに付き合ってくれているわけですが、この 3 年間の子どもたちの「ひとなっていく」[20]育ちが、人間になっていく年輪のコアの部分を形成しているのだと目に見えるようになりました。

文庫を長年主宰し、子どもたちと絵本を読んできましたが、その実践的行為は研究のためにしているのではない、という思いが常にありました。「子どもたちと絵本を読む」という行為を、研究という目的のために対象化・手段化することは良くない、という思いが付きまといました。しかし、イギリスでのヴィクトリア時代の絵本の研究を私なりに纏め上げたことから、研究の対象が書物から、絵本に関わる時の子どもたちの有り様そのものに向けることも同じことかもしれない、と思うようになっていきました。「だっこでえほんの会」の歴史は 10 年ですが、青山台文庫の歴史は 40 年ほどあり、この間、私にとって、子どもたちとの絵本読みは、まさしく「子どもたちと読む」であって、「子どもたちに読む」ではありませんでした。絵本を読むのは、私であっても、私の声を聞いて、絵本を見ている子どもたちの中に起こっていく感情の動き（揺れ、渦巻き、突出など）が、彼らの顔や身体へ現われていき、それが絵本を読みつつ子どもたちの反応を感じ取っている私に跳ね

返ってきて、私の中で感情が動いていきます。結局のところ、研究の対象は、自分自身そのものかもしれない、行き着くところ、このことも「私はなぜ生きているのか」という問いを考えることに繋がるのだと、糸をほぐすように、理解していきました。

「子どもと絵本」というよりは、「〈子どもと絵本〉の現象学」というようなテーマに焦点を当て、研究の言葉を紡ぐには、恣意的な学びではなく、ある種の本質に迫る学びが必要であり、そこから、私自身のからだから出てくる言葉を使いたいと思うようになっていきました。子どもの心の動きの研究、あるいは、0歳からの育ちの研究というと、深層心理学や発達心理学という学問分野があります。しかし、私の研究目的(生きている目的)は、子どもの心理を知ることも重要ですが、そこに絞り込むのではなく、根本的には「私（人）はなぜ生きているか」を考えることにありました。だから学問分野としては哲学だという思いが強くありました。そして、模索している中で、本を通じてですが、鷲田清一という人に出合いました。『「聴く」ことの力』の中に、次のような文章がありました。

> 「哲学」ということで、ことさらに西洋の哲学史、あるいは現在の大学でおこなわれている哲学の講義やゼミナールのことを思い浮かべなくてもよい。あるいは、書斎で頭をかかえ込み、もだえつつことばを紡ぎだす哲学者の像を思い描かなくてもよい。じぶんの存在をその意識について、あるいは世界の存在と構造について考えるということ、そしてそのことの可能性とさらにその権利根拠とをみずからに問いただしつつ、自己と世界について考えるということ、そうした思考のいとなみをかりに西洋人にならって「哲学」と名づけるならば、それはアカデミズムの内部の作業にはとても押し込めることのできないようなひろがりをもつことはあきらかである[21]。

「アカデミズムの内部の作業にはとても押し込めることのできないようなひろがり」をもつ「生きている場」を「哲学」と結びつけることは可能なのだ、私が学びたいと思っている場はここだと、からだが熱くなる思いで、こうした文章を受けとめました。人が生活の場（生きている過程）で出会った現象、見聞きした現象を自分の身体の中に取り込んで、哲学の言葉として表現していく研究の場がここにあると理解しました。ここなら、私が子どもたちと出会って、子どもたちの身体や言動を見聞きし、私の身体が驚きや感動で震えたりすることを、単にうわべを書きとめるのではなく、なぜこうなるのだろう、この現象は人間のどんな深いところから立ち現われるのだろう、ということの思考を深めることが

できると思い、この研究者がおられる学問分野の門を敲こうと思い決めました。

鷲田清一先生は、大阪大学大学院に臨床哲学講座を創設されましたが[22]、2011 年に大学総長の座を降りられ、大阪大学を去られました。私がお聞きしたのは、「最終講義」だけでした。さて、実際に大学に行ってみれば、西洋哲学史や哲学の講義もゼミも必要で、図書館で頭をかかえ込む時もありそうですが、これまでの青山台文庫での 40 年近い〈子どもと絵本〉の経験、10 年を経過した幼い子どもたちと絵本の会である「だっこでえほんの会」での経験を通して、私が長年にわたって考え続けてきた問い「私（人間）は、なぜ生きているのか」を、この生活世界での存在を意識しつつ、考えてみたいと思っています。子どもたちと絵本を共有する場は、そのようなことを考えることを可能にしていると、70 代に入って、確信をもって言うことができます。

13. 大阪大学大学院の臨床哲学講座に身を置いて

2011 年 4 月から、週に 1 回、金曜日に臨床哲学講座に足を運んでいます。金曜日 4 限の「臨床哲学講義／演習」、金曜日 5 限の「臨床哲学論文作成演習」の授業の内容はよくわかりますが、金曜日 6 限の「臨床ネットワーク」の授業は、よくわからない、というよりは、これはなんだろう、と当初思いました。そして、「ああ、これが臨床哲学の有り方なのだろう」と納得しました。ある種の感動でもありました。参加者のヒエラルキーをなくす努力をされていること、聴く気持ちを保つこと、待つ姿勢を保つことなどです。だから物事を決めるのにも時間がかかることがわかります。参加者のみなさんが、今ここに、生きている自分がいる、あなたがいる、ということを大事にされています。またメーリングリスト上でのやり取りでは、学部の学生さんから院生の方々、教員の方々まで、お互いに丁寧にやり取りし、対応されていることに感銘を受けました。

臨床哲学とはなにかを、私流に、いま理解していることはこういうことです。「臨床」を『広辞苑』で引くと「病床に臨むこと」とありますが、「床（とこ・ゆか）」は、生活の場のことで（私の理解です）、その「床」に身を置いて、見えてくるものを考えるということではないかと思っています。その「床」は、実践と言われるフィールドでなくてもいいかもしれません。日々の生活もまたフィールド（原野であり、野原であり、畑でもある）だからです。問題を抱えている人と共にあってもいいし、普通に見える人（誰でも問題を抱えています）であってもいい。要するに、いま、ここに、生きているもの同士が、交流し

（からだ、表情、言葉を使って）、ときには受け取り、ときには手渡し、ときにはぶつかり、訳が分からなくなり、それでも付き合っていくと、何かが生まれるかもしれないということを考える学問ではないか、と考えています。

このような学問（研究）は、特に現代にあっては非常に大切だと思われます。何事もすぐに答えを求められる時代にあって、何事もお金に換算するように要請される時代にあって、何事も早く上手にできることが大事な時代にあって、また人びとの多様性が認められず規格品のような画一性が求められる時代にあって、「いっしょに、じっくり考えましょう、語り合いましょう」などという人間はそうそういるものではないのです。

おわりに

臨床哲学は、すべての人々の哲学なので、そこにいる人は誰でもまず受け入れることが大事なのではないかと思います。あの世から来たてのあかちゃんから、あの世にまもなく旅立つ人まですべてを。

フッサールが 70 歳の誕生日に語った言葉、「私は哲学しなければならなかったのです。そうしなければ私はこの世界で生きることができなかったのです。」[23] は、フッサールだけの言葉ではなく、意識するかしないかはありますが、すべての人の言葉ではないかと思います。

人間には、哲学が必要です。それも、生身の人間が生きている場である生活世界での哲学が必要です。

注

1　墨塗り教科書とは、第二次大戦直後、占領軍の指示などによって、国民学校・中等学校・青年学校等の教科書の中で軍国主義・侵略戦争・天皇制・国家神道を鼓舞する部分に墨を塗ったものをいう。（『広辞苑』より）

2　『子供の科学』は誠文堂新光社より 1923 年に出版された子ども向けの科学雑誌。子どもたちに科学をわかりやすく学べるようにと編集されており、現在も刊行され続けています。

3　この頃の私の夢は、文字解読者になることでした。数千年前に書かれた文字が解読されないままでいると知ると、身の置き所がないくらいつらい気持ちに陥り、いつかその文字の解読者になりたいもの

だと思いました。誰かが書いた記録が読まれないままでいるということは、非常に理不尽なことに思われたのです。

4　新幹線は、1964 年に東京・新大阪間の東海道新幹線が開業。

5　御輿員三（おごし　かずそう）　1917 － 2002、享年 85 歳。京都大学文学部文学科卒業。1962 年 － 1980 年、京都大学英語学英文学教授。英詩研究の第一人者。

6　吸収性の良い紙おむつ（使い捨ておむつ）の登場は、1980 年代に入ってからのようです。それまでは、着古した浴衣をほどいて、おむつを作りました。私の母もたくさんの布のおむつを作ってくれました。わが家の子どもたちは、年齢がくっついているため、おむつ時代のあかちゃんがふたり重なる時期があり、洗濯も大変なら、乾かすのも大変でした。乾きの悪い雨季や冬には、家中に綱を張り巡らし、おむつを干しました。まるでトンネルをくぐって暮らしているようなもので、今は、懐かしい思い出です。

7　「おかあさん、ごはんと本とどっちがすき」は、私が初めて出版した本のタイトルとして、編集者が非常に気に入り、題名にもなりました。地域の団地の新聞「千里タイムズ」に 15 年間連載した、暮らし、子育て、文庫活動、社会的な関わり、絵本についてのコラムが、結果として 5 冊の本になって創元社から「絵本の散歩道」シリーズとして出版されました。1)『おかあさん　ごはんと本と　どっちがすき』1982 年 8 月、2）『おかあさん、本よんで』1984 年 12 月、3）『絵本という宝物』1988 年 5 月、4）『絵本のある生活』1992 年 7 月、5）『絵本があって花があって』1995 年 2 月。

8　千里ニュータウンは 1962 年から入居が開始された日本最初の大規模ニュータウンです。開発は大阪府企業局によって行われ、豊中市と吹田市にまたがっています。50 年近くが経過し、入居者の老齢化と立て替えの問題が大きく浮上しています。一方、当時の 5 階建て（エレベーターなし）の低層住宅地では、樹木は建物より高くなり、並木道も住宅街も美しい景観を呈しています。しかし、数年後の建て替え後には、建物はエレベーター付きの高層住宅となり、樹木は建物より低くなり、景観は激変するでしょう。そして青山台文庫も幕を閉じることになると思われます。千里ニュータウンは、1962 年から入居が始まっていますが、私たち夫婦が入居した 1964 年は、阪急千里線の終点である北千里地域の入居が開始した年であり、私たち家族は典型的な千里市民と言えるでしょう。

9　10 人掛けのテーブルは、家族の食卓であり、子どもたちが宿題をする机であり、私の書き物机にもなりました。物置台にも、「なんでも台」にもなりました。

10　松岡享子「解説『子どもの図書館』の驚くべき浸透力」、『石井桃子集』第 5 巻、岩波書店、1999 年、p.296.

11　子どもの読書推進実行委員会編『子どもと本の出会い・実践記録集　子どもに翼をあたえるために』、読書推進運動協議会、2000 年、p.533.

12　文庫の開設場所について、今では、子どもの読書と結びつく場ということで一般的に認められる傾向にあり、自治会などが地域の集会所、マンションの集会所などを無料で提供をしてくれるところも多いようです。その場合、自治会の所属にするという形を取り、本箱代、本代の資金援助もあります。それに対して、女性が自分たちだけの力で運営をしていく場合には、今もって厳しく、中には、文庫の当日になると、本を集会所に運び入れるというところもあります。青山台文庫の場合、本箱 10 基を常設させていただけるだけでも恵まれていると言えます。公団に払う年間の会場使用料が、文庫が参加者（参加費ひとり年間 500 円）からいただく全会費を上回るとしても。

13　一般的な絵本は、32 ページ構成です。しかし、最初の印刷ページである「扉ページ」は、見開きの右ページから始まり、最後のページは、見開きの左ページで終わるため、その間は 30 ページとなり、見開き場面は 15 になります。

14　絵本が内包している可能性として「越境」を容易にするという点があります。絵本を活用すれば、世界の平和にも寄与しうるかもしれません。

15　イギリス留学について、その実行には時間がかかりました。子どもたち 3 人がみんな 20 代に入り、一緒に暮らしていた義父が 85 歳で眠るように亡くなった年の翌年、夫とイギリスへ旅行。飛行機が大阪に着陸直前に「イギリスへ留学する」と告げました。

16　*A History of Victorian Popular Picture Books*、風間書房、2006 年。イギリスの絵本の歴史研究をテーマとした英語論文の出版に、日本学術振興会が 620 万円という多額の助成金を出してくださったことに感謝しています。

17　ハーヴェイ・ダートン賞（The Harvey Darton Award）の対象となる研究書は、「英語圏の子どもの本の歴史に新鮮で詳細にわたる知見を寄与する本であり、歴史的書誌情報だけではなく幅広い文脈のなかでより学問的にも書かれている本であること」とされています。

18　西宮市にある聖和大学は幼児教育の専科大学として伝統のある大学でしたが、2009 年 4 月関西学院大学に統合されました。

19　イギリス滞在中の 1994 年－ 2000 年の 6 年間、年に数回の日英往復をしますが、本拠地はイギリスでした。この間、青山台文庫は若いメンバーによってきちんと運営されました。

20　「ひとなる」は、一般的にはあまり使用されない語ですが、子どもからおとなになっていく過程を「人間になる」や「成長する」という語よりも「ひとなる」という語の方がよく表現していると思い、この言葉を用いました。私の祖母が、近所の娘さんなどに「あんた、よう、ひとなったなあ」といういい方をしていましたので、尾張地方の方言かもしれません。『広辞苑』では「人成る」とあり、「成人する。成長する」とあります。